修養のために訪れる地、それが近江八幡
―ここには見本となる“生き方”“生き様”がある

村井幸之進氏（元近江八幡市役所観光担当部署職員）

近江八幡市生まれ。近江八幡市役所にて税務、商工観光等に携わる。その後、福祉こども部長を経て、現在、社会福祉法人サルビア会特別養護老人ホーム水茎の里施設長。

目次

■ まちづくりという視点で観光を捉える 2
■ まちを想い、活動する土壌づくり 3
■ 見本となる“生き方”“生き様”が八幡にはある 4
■ 先人を超える人をつくるのが、ここに住んでいる人の役割 5
■ 修養に値する理念、志が八幡にはたくさんある 5
■ もともと存在していたものを復活させる、住民に向けて発信する 6
■ 他の地域を通じて近江八幡のほんものを見極める 7
■ 「死に甲斐のあるまち」 9
■ それぞれの得意分野を活かし、自分が楽しく取組む 10
■ 近江兄弟社のヴォーリズさんから近江八幡のヴォーリズさんへ 11
■ 『近江八幡市観光リニューアルプラン』の記録 12
■ 近江八幡の今とこれから 13
■ 行動する人を見守り手綱を引く人の存在 14
■ 沖島は私たちの財産 15
■ 「観光はまちづくり」というイメージをつくってきた 16
■ 観光振興の意義を市民の目線から再構築することが必要 16
■ その時々に志を持って取り組むこと、怖いのは何もしなくても観光客が来ていること 17
■ 近江八幡のこれまでの柱とこれからの柱 －まちのためにどのような存在であるべきか 19

Copyright © 2022 JTBF All Rights reserved.

司会　近江八幡はこれまで八幡堀に始まるまちづくりを中心に語られることが多かったのですが、そうした中において、観光に対して他の地域とはやや異なる独特な意識が形成されていったように感じています。そこで、近江八幡の観光に関して、こうした意識が形成されに至った背景や経緯、具体的には、これまでどのような取組みがなされ、またその際どのような議論があったのか。当時の雰囲気なども少しお伺いしたく思っています。

資料を通じて「いつ何があったか」という出来事を調べることはできます。ただそれ以上に、その取組みの背景や関わった人物の想い、実際その取組みがどうであったかなどを含めて把握し記録していくことが近江八幡にとっても、そして我が国の今後の地域での観光振興を考える上でも重要と思っており、行政の立場から関わられた時のことについて、可能な範囲でお聞かせいただきたく思います。

■まちづくりという視点で観光を捉える

村井　まず観光振興というのは法律に基づいて取り組むものではないと思うので、今まで私なりに自分の中でイメージを持って、観光振興に取り組んできました。私は、観光がお客さんを呼んでくるというのは、あくまでも結果の話であって目的ではないと考え取り組んできました。私が初めて観光部署に配属された当時は、長浜がちょっと先を走っていました。長浜は駅を降りると商店街がすぐのところにあります。確かに表の商店街は結構賑やかですが、表通りの一歩奥に行くと、観光客に対する市民の反応も異なるという話を当時聞かせてもらったことがあります。

そうした状況を見聞きして、やはりそこに住んでいる人たちが、誇りに思えるまち、結果としてそれが観光客にも喜んでもらえるまちでなければと思いました。

地域の人たちが中心の観光、それが所謂「まちづくり」だというふうに思いました。（社）近江八幡観光物産協会元会長の故山本傳一さん[i]がいわれた「住んでよかったまち　訪ねてよかったまち　もう一度訪れたいまち[ii]」というキャッチフレーズに最後結び付いていくのですが、まちを愛し熱く語る市民の皆さんと出会い話を聞く中で、まちづくりという視点で観光を捉えなければいけない、観光はまちづくりだと気が付いていきました。そして、最初に取り組んだのが、「近江八幡ふるさと観光塾[iii]」でした。

「近江八幡ふるさと観光塾」は、20年以上前に始めたもので、観光客をおもてなす前に、地域の人達に自分たちのまちの財産、所謂良さ、例えば、豊臣秀次公[iv]のことやヴォーリズさん[v]のこと、そして「まちづくり」のことなどを学んで頂く場として開講しました。その中で、今や多くの観光客を迎える八幡堀は、当時の近江八幡青年会議所（以下、JC）が中心となった「八幡堀保存再生運動」により蘇りましたが、八幡堀を観光資源にしようと思って運動に取り組まれてはいないのです。運動の中心を担った当時の JC メンバーが、八幡堀が永年の家庭雑排水などのヘドロの堆積でものすごいドブ川になってきて、地元自治会の要望を受け県河川行政が埋め立てて散策道と駐車場として活用する計画で国の認可を受けたものを、当時の JC 理事長が、八幡から外に出て成功された人もいるし、そうではなく失敗して帰ってきた人も、この八幡堀の水面を見ながら、もう一回頑張ろうという、そういう精神的支えの役割を果たしてきた堀です。言わば近江商人の心のふるさとと言うべき八幡堀を埋めてはいけないという思いから行動されたものなのです。「堀は埋めた瞬間から後悔が始まる」は、当時の JC の行動理念でした。

八幡の中にはいろいろな観光資源がありますが、考えてみると皆、地域の人たちの誇りとなる宝物ばかりなのです。そこで当時、「近江八幡ふるさと観光塾」いう市民講座を開いて、市民の皆さんに、まず八幡の誇りというものを学んで頂こうと思いました。観光塾は15回シリーズで開講しました。そして、講座出席率が8割以上の受講者に修了証書をお渡しし、「近江八幡観光ボランティアガイド協会[vi]」を設立し、修了証書をもらった方々が協会に参画できるという仕組みとしました。

ふるさと観光塾に応募された方は、当初は近江八幡市に転入された方が多い状況でした。近江八幡は、大阪までも1時間、京都なら30分、40分で通えるベッドタウンです。ある転勤族の奥さんが、自分の子どもが八幡をどうも好きではないということに気づかれ、

Copyright © 2022 JTBF All Rights reserved.

それは恐らく自分がまだ八幡というまちを好きではないというのが子どもに伝わっていたのだろうと。そこで観光塾で近江八幡を勉強して自分が八幡を本当に好きになったら、子どもも八幡を好きになってくれた、という人もいました。転勤族の人が八幡のことを学んだことによって、ここが本当に自分のふるさとと感じて頂くようになり、その人達がボランティアガイド協会に参加してくれたことは本当に嬉しかったです。当時約40人を募集して50人位の申し込みがありました。

結構多くの方が応募されて、それはびっくりしました。面白いのは、女性は主婦の方が多く、男性は学校の先生や銀行を退職された方など高学歴な方が多く、不思議な色分けだなと思いましたが、男性は退職され、新たな知識や生きがいをこのようなかたちで求められるのかなと思いました。ふるさと観光塾を開講する側と応募する側の想いが上手いこと繋がって、観光ボランティアガイド協会ができました。

司会　塾開講後は、「広報おうみはちまん」でふるさと観光塾やボランティアガイドさんが紹介されていましたね。

村井　ガイド協会設立当初は事務局を商工観光課で持ちましたが、3年経ったら自分達で運営してくださいよと最初から自立を前提に取り組みました。その後は非常に見事な運営でした。会議の進行、ガイドに出る順番、ガイド受付担当あるいは会計など全部自分達で進めて頂いたのです。さらには、観光ガイド時に着用するユニホームを作ったりなど、前向きに一致団結して取り組んで頂き、それは本当に良かったです。

また、観光協会の会員事業所が、賛助会員として活動資金を提供して頂いたことも事業の継続につながりました。

■まちを想い、活動する土壌づくり

村井　ふるさと観光塾とともに、最初の頃に取り組んだものとして「近江八幡ほっとタウンクリーン作戦[vii]」があります。八幡堀保存再生運動が始まる前には、堀端を犬を連れて散策している人が、例えば犬の糞を八幡堀に捨てたりなど普通にあったようです。もしそんな状況が続いていたら、おそらく観光客に来て頂いても、まちの人がそんなことしていたら、「なんてことをするのか、このまちの人は」と思うでしょう。素晴らしい景観や歴史の中に癒しや非日常を求めてこられる観光客の方が、近江八幡を選んで頂き来られたのに、そのまちの住人が、自ら大切なものを汚すようなことをしていては。まちをきれいにするのは来訪者へのおもてなしですが、住んでいる者にとっても気持のよい生活空間づくりです。そこで観光協会員を含め住民意識を高めるために、町の宝物は、自分らできれいに維持しようと、それで始めたのが「八幡堀ほっとタウンクリーン作戦」で、これももう20年以上続いています。

まずは地域の人たちが、このまちが好きで、宝物を探したり、きれいにしようという土壌をつくっていくというのが大事なことの一つと思います。「ふるさと観光塾」「ほっとタウンクリーン作戦」の他にもう一つ取り組んだことしては、八幡という近江商人発祥の地が反映していた歴史を振り返り、八幡文化の掘り起こしをしたことです。このまちの財産、良いものの掘り起こしです。

例えば江戸時代に12回にわたり朝鮮王朝の使者の行列が何百人と、対馬や牛窓などに上陸され、行列し江戸まで行かれた「朝鮮通信使」が八幡にも立ち寄られ、その歴史資料が今も残っています。1990年代、もう20年ぐらい前に、市立資料館の館長が非常に熱心な方で、商店街の会長さんも協力頂き「朝鮮通信使と街道文化」というイベントを2日間かけて行いました。韓国の領事にもお越しいただき、朝鮮通信使の行列を再現したり、当時の資料からおもてなし料理を復活し弁当として販売しました。三重県四日市市などいろいろな所に朝鮮通信使に関する踊りが残っていて八幡に来てもらって、国際色豊かな市を挙げてのイベントになりました。

また、これも調べて分かったのですが、日牟礼八幡宮には近江商人・西川伝右衛門の十世・貞二郎による「日觸詣（ひむれもうで）[viii]」という謡がつくられ、毎年薪能が開催されていたようです。それもまちの誇りの一つです。それを復活させようと八幡宮能舞台を活用し「近江八幡薪能」として5～6回開催しました。嬉しかったのは、観世流能楽師が八幡の人で、その方にお願いし、薪能をやりました。あれも本当に良か

Copyright © 2022 JTBF All Rights reserved.

ったです。

田中　幽玄の世界でしたよね。

村井　また、近江八幡には、古くから葦産業がありヨシズ（葦簀）などが作られています。それは300年間も続いている産業で、新芽を吹かすために春になるとよし焼きを行います。それは何回見ても素晴らしいので、よし焼きと言う春の風物詩をイベントにできないかと考えました。

淡海環境保全財団[ix]にお願い行って、水質浄化に役だつヨシの生育に必要なよし焼きを春の風物詩としてイベント化したい、これも八幡の水郷の宝だと説明し、県内外からアマチュア写真家を対象によし焼きをモチーフとした写真展を開催しました。また、写真展や西の湖をイベント会場にヨシ船をつくるなど「近江八幡ヨシ焼まつり[x]」として県から金銭的支援を受けて開催しました。

また、西国31番札所長命寺は、紫陽花が凄く綺麗な寺です。住職さんが、毎年自分で植えられて、紫陽花が本当にきれいな紫陽花寺といわれるまでに整備されました。そのような素晴らしい景観の長命寺で何とか良いことができないかいうことで始めたのが「長命寺あじさいコンサート」です。県内で活動される「湖笛の会[xi]」というフルート奏者代表の中山登志子さんが協力してくださり、これもずっと続きました。

田中　20回開催しましたね。

村井　このような活動は全て八幡市民の財産なのです。

■見本となる“生き方”“生き様”が八幡にはある

村井　そして一番印象に残っているのは、ウイリアム・メレル・ヴォーリズさんです。私自身、ヴォーリズさんに関するいろいろな本を読みましたが、ヴォーリズさんは、1905年に近江八幡に24歳の若さで八幡商業学校[xii]の12代英語教師として来日し、八幡を離れることなく、生涯を八幡の発展のために尽くされ、1964年に亡くなられました。作家上坂冬子氏が中央公論に投稿された「天皇を守ったアメリカ人」によると、ヴォーリズさんの秘書井川忠夫氏の手帳から、ヴォーリズさんは、マッカーサーに天皇を残してほしいと訴えられ、天皇を守ったアメリカ人として紹介されています。私が1990年くらいに商工観光課に配属されたときは、ヴォーリズさんは、まだ近江兄弟社という会社のヴォーリズさんでした。

私は小さい時に、祖父から「畳の上で死ねなあかん」と言われました。畳の上で死ねるというのが幸せな死に方だと。ところが、ヴォーリズさんは、アメリカカンザス州レブンワース市[xiii]という所に生まれ、小さいときに小児結核に罹り苦労されましたが、1人で生まれ故郷を離れ東洋の僻地まで来て、更にこの地で社会貢献をし、最後は両親まで呼び寄せて亡くなられています。近江八幡のまちがまちであるためにヴォーリズさんは社会資本を整備され、近江八幡を「世界の中心」といい、丸に点（・）のサインを書かれました。この人の生き様というのは、近江八幡の、これから若者の生き方の見本になると当時強く思いました。

当時は池田町に吉田希夫さん[xiv]という、ヴォーリズさんと近しい方がまだご存命でした。私は、吉田さんのところに毎日通いましたね。希夫さんは、近江兄弟社の元社長で、ヴォーリズさんのことが物凄く好きで、ヴォーリズさんの写真や肉声テープ記録などを持っていらっしゃいました。また、福井清一さん[xv]も物凄くヴォーリズさんに傾倒されている方で、ヴォーリズ記念館の館長をずっと務められていました。その方のお話からもヴォーリズさんの人懐っこい人柄が偲ばれました。

ただ、当時は、市行政が一つの企業の創業者に脚光を当てるのは難しいものがありましたが、私は、ヴォーリズさんというのは、近江八幡の宝だと確信していました。ヴォーリズさんを凄いなと思った一つの理由として、浄土宗のお坊さんが、行き倒れになっているのをヴォーリズさんが看病されました。困っている人がいれば誰でも受け入れられたのです。

田中　結核、遠藤観隆[xvi]ですね。

村井　八幡山の麓に、昔肺結核の療養所として開かれ、現在「ヴォーリズ記念病院」という病院あります。当時近江八幡の人口が1万人ぐらいの時に開設されています。結核は当時特効薬はなく共同生活で療養を続けたようですが、今の認知症グループホームと同じ考え方があると思います。私は、個人のプライバシーに配慮した個室を備えた、今の福祉施設の先駆け

Copyright © 2022 JTBF All Rights reserved.

であり、すごいなと常々思っていました。

その五葉館という建物は、手のひらを広げた形をし、指の部分が各個室に分かれています。窓を開けたら横の部屋、隣の人の顔が見えるのです。だから、お互い頑張っている姿が見られますし、手のひらがリビングで共同生活の場所になっています。そのような建物を大正時代にヴォーリズさんは作られているのです。建築で稼いだお金、つまり収入の何十パーセントを公益事業につぎ込んでおられるのです。現在は利益の何パーセントという会社はありますが、収入の何十パーセントを社会貢献につぎ込むなどを当時にされていました。東洋の小さな国日本に来て、そして近江八幡という田舎から離れることなく、「世界の中心は近江八幡にあり」と唱えられました。

しかし、私が商工観光課に来た当時は多くの市民がヴォーリズさんを知りませんでした。私も色々な書物を読んで勉強したり、近しい人たちからヴォーリズさんの人柄を知り、ヴォーリズファンの一人になりました。そして、今も残るヴォーリズ建築の保存に向けて「ヴォーリズ建築保存再生運動一粒の会[xvii]」を起しました。それは、ヴォーリズ建築の中にヴォーリズさんの理念や生き様、良さがいっぱい感じられるからです。郵便局にしろ、手抜きのない建築ですし、風通しも良いですし、健康的で明るい。そして耐震も考えられています。

■先人を超える人をつくるのが、ここに住んでいる人の役割

村井　そして、凄いなと思ったのは、豊郷小学校の出来事です。豊郷小学校には、階段の手すりにイソップ物語の「ウサギとカメ」の彫像があります。これは、長い人生の生き方をイソップ物語のウサギとカメに例え教えています。この小学校は、丸紅の古川鉄治郎[xviii]という人が寄付して出来たものです。その竣工記念に、町民が、古川さんの銅像を建てようとしました。しかし、ヴォーリズさんは「そんなことをしてはいけません」「古川鉄治郎さんを超える人をつくるのが、ここに住んでいる皆さん方の役割ですよ」と諭されたそうです。この言葉、凄いなと思います。

ヴォーリズを偲び3回のシンポジウムを、まちづくりは人づくりというテーマで行いました。シンポジウムの基本にあるのは「ひとづくり」、噛みくだきますと、子どもたちに、こういう人がいて、この人らを目標に、あなたたちは大きくなって、この人を超えていくのが、これからの子どもの役割だと思いますし、私たちはそういった先人の、そういう志を引き継いでいく。これはヴォーリズさんだけではないですし、近江商人もそうです、秀次公もそうです。近江八幡は、秀次公没後、天領になってしまったから、町民自らが橋を作ったり、学校、教育に関してもそうです。

私は、「先義後利之栄」という八幡商人の家訓が好きです。義を先にしてすれば利はおのずと後から付き家業は栄えるということです。また、有名な「売り手よし、買い手よし、世間よし」という三方よしの家訓に関しては、五個荘商人の家訓が紹介されたりします。そこには常に理念が先にある。確かに現代人は高学歴教育を受けて大学で学んだりしていますが、私は、これから本当にきちんとした倫理というか、そういうものを育てていく時代だと思います。その時に、八幡には凄い先人が何人もいます。私はこれらの家訓は財産の一つで観光と思っています。しかも学びの場として、例えば、村雲御所瑞龍寺さんの境内や西川甚五郎さん[xix]の建物を使わせてもらって近江八幡で人間塾、社会塾を開催してはどうでしょうか。

田中　人間形成などですかね。そうしたものことがないと、本当に心の豊かな社会にはならないのでは。

村井　私はヴォーリズ饅頭など、そういうものは駄目だと思います。旅行の証として、そのような土産などが欲しい、買いたいであれば、それも良いですが、それは八幡に来た目的ではないと思います。例えば、西川甚五郎さん、布団の西川さんは、理念を持って商売を続けてこられました。それらは、八幡の財産であり、これを八幡の観光として、八幡商人の生き方を学びたいという目的の観光があってもよいのではないでしょうか。

■修養に値する理念、志が八幡にはたくさんある

司会　全国にはいろいろな観光地があります。その場で見て感動するということもあれば、旅行の終わりにお土産など購入して持って帰るなど、観光地では

Copyright © 2022 JTBF All Rights reserved.

様々な活動が行なわれます。ただ、人が旅行して得られる、持って帰られる一番の財産は、その人の持っている価値観、物差しを変える、その後の長い人生に影響を与えるような価値観かなと思ったりしています。勿論、近江八幡にも外の人をも惹きつける、ほっとさせる風景等いろいろあるのですが、そうした中でも、精神的なモノ、志がこちらの究極的な観光価値なのだろうと感じています。

村井　修養[xx]できるようなロケーションいうか、自然や歴史が感じられるほんものが八幡にはたくさんあります。例えば先ほど言いました、水郷の手漕ぎ船の上で瞑想もできますし、琵琶湖に浮かぶ沖島という所も素晴らしい自然景観です。商人の町家でもそうです。そうしたものをビジョンをもって上手く活用したら、他にはない倫理を観光資源としたものができると思います。

田中　他にはないですね。

村井　八幡の良さというのは、そうしたところだと思います。これこそ、市民も誇りに思えるまちづくりだと思います。

司会　そうした理念とか志が財産だというふうに、お気付きになられたきっかけはあるのでしょうか。八幡に住んでいると、子どものころからそうしたものをなんとなく感じているのでしょうか。

田中　自然とですね。

司会　子どもの時は気付かなかったけど、大人になって分かるというか、気づきにつながるような教育などがあったのでしょうか。

村井　そうしたことは知らないという人も多くいます。そうした状況にこそ観光が果たす役割があるのかなと思っています。

　だから田中君の役割は、八幡を更に好きになって、自分しか知らない八幡の隠れた良いところを見つけて、本当に八幡が好きで、この人ならという人に、そういうマニアックなところ教えてあげてほしい。

■もともと存在していたものを復活させる、住民に向けて発信する

村井　近江八幡は、地勢として真ん中に商人の町家街があって、駅のほうには、転入してきた方などの新しい住宅街があり、外周はほぼ農地です。私は農村の生まれで、市役所に勤め、観光は10年ぐらい担当しました。最初は会計・税務を10年ほど担当し、それから2、3年は地区改良課そして観光担当になりました。その時はヴォーリズさんのヴォも知りませんでした。秀次が何者かも深くは知りませんでした。秀次公の墓がある高野山に行ったことはありましたが、そのときは関心はありませんでした。そんな状況で商工観光課に配属され色々と学ばせて頂きました。しかも、皆さん自分たちの知識経験、話したくてうずうずされていました。ちょうどあの時代は、吉田希夫さんご夫妻、山中靖城さん[xxi]などは、ヴォーリズさんと近しかったり、近江八幡の郷土歴史家であったりで、本当に心が熱く、孫・子の年ほど違う私にやさしい方々でした。

　ただ、私が本当に失敗したと思うのは、お話を聞いてテープで幾つか残していた音声記録をきちんと保存出来ていなかったことです。写真などは、観光協会でも、頻繁に活用するので、ネガを整理し保存していますが、まちの方のヒアリング記録は保存できていませんでした。

司会　理念や志がどのようにしたら受け継がれるかなと思うと、一つは記録や書物を通じて。あと一つは直接口頭で受け継がれてきたのかなと。

村井　そういった意味では、ふるさと観光塾は大切な役割を果たしていると思います。

田中　大事ですね。

村井　もう一つは、歴史遺産を活用したイベントも重要と思います。例えば「八幡堀たそがれコンサート」では、八幡堀の上に水上特設ステージを作って、そこで近江商人の劇をしました。脚本を作られたのは地元の人です。たそがれコンサートは。みんなの手づくりです。目的は、近江商人の人物像を今に伝えることです。役者さんも京都の太秦から来て頂きました。

　たそがれコンサートは夜に開催されます。昼間にリハーサルします。船上でバイオリンやフルートなどの演奏、そして新町浜という階段状の所が観客席になります。奏者は、白雲橋のほうから船で行くのですけどね。このコンサートで近江商人の人物像や、我々の先祖の素晴らしさを、市民も含めてみんながそれを見て楽しみながら学ぶことをしました。

Copyright © 2022 JTBF All Rights reserved.

ふるさと観光塾や八幡堀たそがれコンサートの他に、日牟礼八幡の薪能でもそういうことが言えます。要するに嘘というか新たに作り上げたものではないのです。もともとここに昔存在していたものを、今の時代に合わせ復活させ実施したのです。ただ、そうした目的をもって取り組んだもので、無くなったものもあり非常に残念です。ヴォーリズさんのシンポジウムも3回開催しましたが、終わってしまいました。結局私たちの力不足だったのだと思いますが、続けることによって、もっと深みがあって皆の誇りとして醸成されていくことができたと思います。ただ、行政主導で進めてきた中で、やはり市民が中心であるべきと考え、観光物産協会等に引き継いできましたが、なくなってきてしまいましたね、残念ですが。

司会　無くなった一番の理由は何ですか。

村井　予算ですよね。

田中　それですね。事業そのものは、否定はされてはないです。

村井　事業は皆さん喜んで頂きました。しかし、行政は、形として残らないものを継続するのは非常に難しいです。ヴォーリズシンポジウムも含め、3年は続きましたので、そういう意味ではよくできたと思います。また、全て無くなったのではなく、形を変えたものもありますよ。「八幡堀たそがれコンサート」はそうです。

田中　明かりのイベントに変わっています。

村井　ただ私は、八幡堀の良さがお客さんを呼ぶという形に変わってきたなと感じています。そうではなく、私は近江商人の志とか、そういうものを地元の人たちに向かって発信することが絶対に必要だと思っています。地元の、市民、住民に向かっての発信というものが、取組のベースになければいけないと思います。私はそれを大事にしてきたつもりです。

田中　どうしても、観光客の数や費用対効果といような、そういうことが基準点になってしまったというのはあると思いますね。

村井　そういうものが評価基準ではないと分かっている人は分かっているけども、観光の評価というのはなかなか難しいです。結局、行政の予算は福祉など全体として、その時々に必要と判断したところに多く配分されるものであり、財源が厳しくなれば観光予算は一番に削られたりしますね。

当時、観光は観光業者がもっと主体的にすべきではないかと、行政がお金出すのではなくてということを言われたりしました。そういうこともありましたが、近江八幡国民休暇村さん[xxii]は観光物産協会に多額の補助金を出して頂きました。ところが、市内の多くは零細企業でなかなかそのような負担はできない状況にありました。

田中君が苦労していてくれていますが、行政も、観光を主導するという形から変えようとするうごきになってきました。

田中　変に民がやってくれるので、あまり出しゃばったらいけないというか。

村井　税金をもらっているということは、つまり観光が市民にどのようなメリットをもたらすかを具体的にイメージすることと思います。先ほど言いました、観光資源を市の誇りとして誇りを次の時代に引き継いでいくなど。たまたま多くのお客さんに来ていただけていますが、そういうことを行政の中でも考えないといけないと思います。観光課に来た職員が、自分がここでの役割は何かと自分でしっかり考えないと。そこには志が必要と思います。

田中　商業で活性化させる民の部分と精神的な部分と両輪で上手いこといったのですが、精神的な部分は見えにくいので、変に引けていったとこはありますね。

■他の地域を通じて
近江八幡のほんものを見極める

村井　『近江八幡市観光リニューアルプラン[xxiii]』などを作らせてもらいましたし、また中部西地域観光振興協議会[xxiv]の関係で五個荘とは仲がよかったです。そのような他の市町の職員との共通認識として、団体のお客さんよりも個人で来てくれる、そうした人たちが町歩きをして、「それぞれのまちの良さを分かってくれる」、それを意識して取り組みました。その後、駐車場を整備していきましたが、八幡の中に駐車場というのは、当時はイメージがなかったです。その代わりに四角柱の道標を作りました。観光客が歩いて回る時に道に迷わないように。

Copyright © 2022 JTBF All Rights reserved.

田中　五個荘にも同じものがあります。

村井　近江八幡や五個荘は、滋賀県内の人が行っても楽しめる町です。隣近所の人が行ってもよし。他の町と一緒にやったこととしては、五個荘との前に、長浜と彦根とも一緒にやりました。観光は泊まってもらわないといけないということで、彦根、長浜、近江八幡で「びわ湖城下町観光協議会[xxv]」（各観光協会、観光行政で構成）というのもやりました。ちょうど長浜の直流化[xxvi]で米原止まりだったのが、長浜まで行くようになりましたので、近江八幡には城はないですが、城跡はあるので、三つの市で連携しました。あれは良かったです。大津など、他の所には負けない面としての取り組みとして。

田中　ちょうど長浜で北近江秀吉博覧会があったりなど、いろいろそうしたものもありました。

村井　その協議会で行ったのが、九州の由布院です。モニターとして3泊4日ほど勉強させて頂きました。当時、中谷健太郎さん[xxvii]や溝口薫平さん[xxviii]など、先駆者の方々にお会いしました。長浜観光協会の清水義康事務局長さんは、物凄いやり手の方でした。彼が熱心で、人を呼んでくるということに対して凄いセンスがありました。黒壁は、当時でも相当賑わっていました。ただ私は、近江八幡で進む方向とは少し違うかなと思っていました。

田中　路線的には違いますね。彦根は彦根城があってどんとしている。そうしたことが縁で、ちょうど4月に協会に入って、年明けの1月、2月、近江八幡が少し暇になる時期に、1カ月研修で派遣してもらいました。長浜は盆梅展で忙しくなる時期です。

村井　近江八幡は江戸時代から民中心の町です。ただ近代に入って自治体が中心になりましたが、それまでは近江商人やヴォーリズさんなど民間人が自らの思いの中で社会資本をつくってこられました。そのことは、私たち市民も理解しておく必要があると思います。そういう志の高い市民が八幡には多くいらっしゃいます。私は今福祉に携わっていますが、近江八幡は全国的にもボランティア参加率が高いと言われています。今でも八幡山の景観を良くする会や白鳥川を守る会など、退職された団塊の世代の方々が、まちづくりに今度は能力を発揮されています。

また、私がこれからやるべきだと思うのは、地域通貨です。そういうものを作ったら、本当にもっと良くなると思う。今、福祉をやっていて、常々思っています。福祉施設にボランティアに来て頂いた方や環境保全に頑張る方など、例えば1時間ボランティアを頑張られたら、コーヒー1杯を近くの喫茶店で飲めるなど。

田中　そうですね、人が輝ける場というのが必要とされるというのがありますね。

村井　だから、人こそ八幡の宝ですよね、観光資源としても。八幡は、時代を先取りした町民の志が色々なところで感じられ、頑張ろうと思えるような町でありますし、大切にしたいなと思えるようなものを、どのように大切に活用していくのか。そういう視点だと思います。東京ディズニーランドのように、人の目を引く新しいものを作り続けていくのも一つのやり方です。しかし、我々の町はそうではないはずです。この地域に昔からあるものを、今の時代に合うように変えていく。先人の思いを今の時代の人たちにつないでいく。つまり、静態保存ではなく、常に動態保存としてです。観光から福祉部局に異動した時に、大きな庭がある近江商人屋敷を代表するような町屋を寄付したいという申し出がありました。伝統的建造物群保存地区にある野間邸です。これを福祉施設として活用させてもらいました。

福祉職場で認知症などを学びましたが、お年寄りは認知症になっても、自分が生活した過去の古い記憶ほど残っているのです。この付近に住んでおられた方にとっては生活をしてきた空間であり、このような町屋は安心されるのです。それに加えまして、建物の一部に、地域交流室というか、外から来た人にお茶でも飲んでもらえる、そんなことをすべきと考えました。これからの観光客は、結構年齢層が高く、ある程度裕福な人たちです。単に物見遊山的に来る人もいますが、しかし、地域のそういう所で、ちょっとゆっくり。それが福祉施設として活用されていても、ちょっと覗きたいというニーズもあると思いました。だから、民家改修型で施設整備する時には、地域の人たちや観光客が入ってこられる地域交流室整備を市の方針として義務化しました。現在、町家でデイサービスが多く提供されています。それらには、皆地域交流室を作

Copyright © 2022 JTBF All Rights reserved.

ってもらったのです。

田中　そして、ちょっと雛人形を展示できる、お茶飲めるなど。

村井　地域の元気な方でもふらっと立ち寄れたり、観光客には、自分のまちにも、こんな施設があったらなと思って頂けたら。

田中　マーケットが最初ではなしにですね。

村井　そう思いますね。そして、ここの町の良さいうのは、木の文化です、耐震の問題もありますが、残念なのは、町家の良さを生かされていた建築家の石井和浩さんが亡くなられたことですね。浅小井の宮大工の方は、まだ元気でいらっしゃるのではないかな。だだ、本当に八幡には伝統を引き継ごうとされるほんまもんの職人がいらっしゃいます。

田中　確かにいろんな職業、能面師がいたとか、ひな人形師がいたとか。

村井　それと、例えば吉井の麩屋さんでも、使う黒ゴマを一つ一つ手で選別してなど。赤コンニャクも地域のほんまもんです。

田中　そうですね。どこかから仕入れてきたものではなくて。

村井　私はこの町はほんまもんの町というか、それが結局は精神のそういうところに結び付いていくと思います。一つ一つを大事にしてもらいたいです。この地域は水が良くないので、酒もあまり良いものはできないようですが、赤こんにゃくは三二酸化鉄の影響で赤くなっています。また赤色つながりということで左義長があります。

田中　つながりというか、全部歴史の中で回っていると感じます。取って付けたのではなくて。

村井　豊臣秀次公が城下町を造る時に、石組で下水道を造っています。あの都市計画は凄いなと思います。

田中　確かにそうですね。

村井　下水が、全部この八幡堀に流れ込むようになっています。しかも、八幡堀に流れ込み堆積したヘドロをすくって、今度は周辺の田んぼの肥料としました。すると田んぼの土地が高くなるので、その土を削って瓦にしたわけですよ。それで瓦産業が地場産業となった。これは、まさに自然循環型の社会です。

田中　循環ですね。

村井　学ぶような教えが本当に多くあると思います。

加えて、肉の文化と魚の文化の調和いうのは良いなと思っています。琵琶湖の鮒寿司もそうですが、湖魚料理。これなどもほんまもんですね。日本の伝統食文化が、この地域には非常に多くありますし、何もかもがほんまに一つずつ美味しい。味わって頂きたいです。

田中　贅沢な、恵まれた土地ですね。

村井　そして、10日ほどの研修プログラムで、精神修養の間にこの食文化を提供できたら、凄いなと思います。近江商人やヴォーリズさんの理念・哲学というものを沖島や国民休暇村、水郷や八幡山、そして町家などを活用して、会社の職員研修や大学などのゼミなどでされたら、深みのある忘れられないものになるのではないでしょうか。

田中　研修の講師にしっかりした人材を望まれる場合、近江八幡には、そのような方が多くいらっしゃいます。

村井　八幡には、講師を務められるような人がたくさんいます。講師リストも作るなど、こちらから発信していく必要がありますね。

田中　ああいうときに覚えたり見たりしたものは、その時は忘れても、どこかで思い出したり、あの時言われたのはこういうことだったのかなどありますね。

■「死に甲斐のあるまち」

村井　そして、衝撃的な言葉というのは、当時の青年会議所川端理事長の「死に甲斐のあるまち」です。人生、やり甲斐、働き甲斐などがありますが、最後は終の栖と言っていらっしゃいましたが、それは非常に自分としては精神的に納得できるものでした。

田中　そうですね。何のために観光しているか、地域のためにという以上の答えがなかなか見つからないです。

司会　どういう場面の中で言葉が生まれるかということ自体にも関心はあるのですが、仮に言葉が生まれても地域で共有するのは難しいことだと思います。他の地域では、ここまで共有されていないように感じていますが、そうした精神的なもの、考えが共有されてく過程とは、そして何がポイントでそうなるのでしょう。

Copyright © 2022 JTBF All Rights reserved.

村井　共有と言っても市民全体が共有しているわけではなしに、JC のメンバーが八幡堀保存再生運動をしていく中で、少なくとも当時の JC には共有されたのでしょうね。それから地域の人を巻き込んでいっていますので、市内全体ではないにせよ、この周辺では恐らく「死に甲斐のあるまち」いうのは共有されているのだろうと思います。

田中　JC に当時30歳で入って、先輩にそのような話を聞かされて、一緒に活動して、卒業して会社の社長になって、商工会議所に入って、ライオンズクラブに入ってなど、時間を掛けてできたというようなネットワークでしょうか。

村井　そのように広がりがまた広がっているという感じがありますね。

ここには凄い逸話がありますよね。昔八幡堀は国の認可事業として埋め立てかけられました。ところが、一度認可決定されたものを当時の JC の皆さんがひっくり返えした。その運動のはじまりは、毎日ヘドロまみれになって堀に入って清掃する地域の若者の姿を見て、地域住民もドブ川に入り清掃活動に参加され、大きな市民運動になっていきました。最後は、工事を進める県の土木事務所長さんが、「コンサルさんが作ったものよりも青年会議所が持ってきた工事案のほうが良い」と言われた。当時の行政では、国が決定した認可事業を覆すという発想はありえないと思います。それを担当の県事務所長さんが首をかけられて、前計画案をゴミ箱に捨てられ、JC の改修案を採用された。同じ公務員として、読んでいてすごく心が打ち震え、勇気をいただきました。結果として、新たに国事業として水緑都市モデル事業が認可され、堀はそのまま残り、護岸工事と今の石畳の散策道になり、何と国土交通省の冊子にも紹介されているようです。そのときの人間模様を読んでいると涙が出るほど感動しました。そして、絶対壊れないと思っていても壊れるものがある、一生懸命やればということも学びました。

自分が正しいと思ってやれば、本当にそうなるのだと思うようになりました。あの近江八幡青年会議所25年史『近江八幡市のまちづくり』は非常に良いもので、当時は自分の進むべき道というものを感じ取ることができました。あの考えがずっとみんなに広まっていったら、郷土愛にあふれたまちになるでしょうね。本当に JC のある一定の年齢の人たちは素晴らしい経験をされたと思います。「堀は埋めた瞬間から後悔が始まる」という JC25年史や『失敗者の自叙伝』などヴォーリズさんの本を読むと、一つ一つがドラマなのです。本当に一つ一つの歴史を大切にしながら、八幡は発展してきたのだなと思います。先人が築いた財産を失わずに。今まで色々と都市開発が進む中で失わずに。

掛け替えの無い歴史的財産をどのように活用するか、これからが重要だと思います。新しいものによってお客さんは来ることはあっても、八幡の市民にとって、その新しいものが、これからどのようなものとなっていくか、必要なものとして上手く助け合う、連携すると表現したらおかしいけれども。

田中　地域にとって、誇りと思えるものとなるかということですね。大切にしてもらえる。

村井　市民の人たちにとっても誇りと思えるものになっていこうとしないと駄目でしょう。

■それぞれの得意分野を活かし、自分が楽しく取組む

司会　先ほどのお話で、コンサートを開催するにあたり、いろいろ外とのネットワークみたいなものを上手く活かしてと話がありましたが、もともといろいろな方とつながっていらっしゃる中で、そうしたものが実現したのでしょうか。

村井　観光物産協会の中にもいろいろなつながりのある人がいて、そのつながりで。例えば、このバイオリンの奏者、私知ってるわ、という話です。

湖笛の会の中山登志子さんは、長命寺を舞台とした「長命寺あじさいコンサート」に一度来て頂いたら、その後は毎年来てくださりました。我々も自信のある財産を使ってやっているわけで、それを演奏頂く音楽家も喜んで頂きました。会場は境内を活用し広くはなく、多くても100余りです。808段の階段の上にお寺があり、会場づくりやお客さんの送迎など、みんな苦労しましたが、当時の武内住職は非常に喜んで頂きました。例えばバスの送迎役や警備員が必要など、コンサートを見られない人も多くいましたが、裏役の

Copyright © 2022 JTBF All Rights reserved.

観光協会員の皆さんも何とか成功させたいという思いで行動頂きました。打ち上げの飲み会は、スタッフみんな充実した笑顔で面白かったですね。「八幡堀たそがれコンサート」でも、シンセサイザー奏者で県芸術祭賞を受賞された井上政廣さんがずっと来て下さり、そういう県内外の著名な音楽家などが、本当このまちを好きになって頂いたというのは、すごい財産だと思います。

田中　結構レベルの高い、その世界でそれなりの地位の方が好きになってくれましたね。

村井　来てもらって。しかも安いお金で来てもらって。それは、このまちを好きになってくれだからでしょう。お金ではないですね。やっているわれわれのこともね。

　それと私たちは広告にあまりお金は使わなかったです。近江八幡国民休暇村さんのおかげで、旅行ペンクラブの人たちに、土曜日、日曜日と取材に来てもらって、かなりの頻度で対応をして、それで、新聞に載せてもらうなど、そのような宣伝活動をしていました。記事を買うのとは違って。

田中　知ってもらう。本当にお酒飲んで、人間性を知ってもらって。

村井　しかもそれは、全部、お金を出さないで行ったのですよ。例えば、紹介するお店では、お店の PR につながるので、当然のようにテレビのロケの時に、全てお店の費用で食事や土産などを出して頂き、休暇村さんには泊めてもらって。観光協会ではお金、なんも出さなんだな。それでも、皆協力してくれました。

司会　休暇村さんは、町のこういう取り組みに対して凄く協力的だったのですか。

村井　そうでした。

田中　地域を良くしたら宿泊客が増えるという考え方で経営されていて、また財団でしたので直接自分たちがということではなかったです。そのことは凄く、他の地域、長浜や彦根などから羨ましがられます。

村井　八幡の観光振興に本当に力を入れて頂きました。歴代の支配人さんはみんな協力的で本当に良かったです。

　そして、忘れてはいけないのが、面白くて個性の強い水茎焼陶芸の里[xxix]の今井力さん。亡くなられて今は息子さんが引き継がれていますが、初代の今井力さんという人が凄い人でした。観光 PR やマスコミの方の対応が手慣れていたというか、すごく上手な人でした。その分野は今井力さんが中心となって、パブリシティというか、宣伝に長けていました。私は観光の土壌つくるのに、今井さんなどの影響を受け成長させてもらったと思っています。丁稚ようかん屋さんの松本伝兵衛さんなど、いろいろな方、芸達者な方が多くいました。その人たちは、皆さん自分でも楽しんでいましたね。しんどい・つらいという感じではなく、みんな自分も楽しみましたよ。

田中　チームワークというのか、役割分担というのか、そうしたものがありました。

■近江兄弟社のヴォーリズさんから近江八幡のヴォーリズさんへ

村井　田中君は観光協会に入って何年になりますか。

田中　1997年に入って21年になります。

村井　私はその前に10年くらいいたのですね。面白かったな。ヴォーリズさんのおかげで、ヴォーリズさんが生まれたレブンワース市と全国では珍しい兄弟都市提携まで結ぶことができたのです。あれも良かったです。

田中　でも本当に、今でこそ近江八幡市のヴォーリズさんになりましたけど。

村井　なりましたけど、当時はまだそこまではという感じでした。当時の近江兄弟社岩原社長やヴォーリズ建築の東洋英和女学院出身のエッセイスト阿川佐和子さんにお越頂き、シンポジウムを開催しました。3回のシンポジウムの開催の間に、上智大学のグレゴリー・クラーク先生、建築家の内井昭蔵先生など本当にいろいろな分野の著名な方、当時はまだ現在ほどではなかったかもしれませんが、それでも当時それなりの方々に来てもらいました。

　しかも良かったのは、当時「ちょっといい旅」など NHK などでいろいろ旅番組がありました。NHK と3年間タイアップしてヴォーリズシンポジウムが開催でき、旅番組でも八幡を紹介して頂きました。ちょうどヴォーリズさんが亡くなられて30年の節目の年で、何かしたいなと思っていた時に、さき程お話した今井力さんの陶芸の里楽市に行ったら、大津放送局の部長の

Copyright © 2022 JTBF All Rights reserved.

小山耕一さんが遊びにきていました。その人は、ヴォーリズさんが執筆した『失敗者の自叙伝』に出てくるヴォーリズさんの学生さん[xxx]のお孫さんでした。

それがご縁で一緒にやりましょうとなって、NHKとタイアップして3年間シンポジウムを開催したのです。面白かったですよ。そしてその4年目にレブンワース市と兄弟都市提携結んだのだと思います。この事業を行うにあたっては、近江兄弟社から多くの寄付もいただきました。

司会　3年間の結果として4年目に提携に至ったのですね。

村井　そうです。軽井沢にも多くのヴォーリズの建築が残っています。ヴォーリズを巡るツアーとして軽井沢に行くなど、いろいろな仕掛けをしました。また、近江八幡でも、軽井沢ナショナルトラストのような建物の保存に関わるグループをつくっていかないといけないと思い、先ほどお話した通り、市内の有志と共に「ヴォーリズ建築保存再生運動一粒の会」を設立しました。夜逃げされゴミの山で雨漏れがひどかったヴォーリズ建築旧八幡郵便局を、再生するため、毎週土日に掃除に行き、3カ月間かけて蘇らせました。ヴォーリズさんのファンなどいろいろな市民を巻き込むための仕掛けもやりました。ヴォーリズさんは、1人で全く知らない日本の八幡と言う田舎に来て、学校をつくり、製薬業を興し、不治の病と言われた結核のために近江サナトリアムを開設するなど、町の発展に大きく寄与されました。嬉しかったのは、その後、ヴォーリズさんの漫画の伝記本ができ、地域の子ども達がヴォーリズを学ぶのにふさわしい良い本ができたと思いました。新聞などいろんなところにヴォーリズさんが出てくるようになりましたが、そのきっかけの種は僕らが撒いたと思っています。

田中　今学校は「ヴォーリズ学園」という名前までなりましたしね。

村井　活動を始めた当時は、近江兄弟社が名前を変えるとは全く思ってなかったです。私は、ヴォーリズさんを必ず案内していましたが、一柳記念館と学園が近いので、学園を案内していると、先生や記念館の福井館長さんが、必ず丁寧に案内をしてくれました。それでファンも増えました。

司会　その時代からかなり丁寧な案内プログラムをされていたのですね。

村井　本当にヴォーリズさんのこと大好きという人間がいないと出来ません。そういう人がいましたね。

田中　誰かも言っていました。説明を聞いて、正直言っている内容は忘れたけど、あの人がヴォーリズさんを好きなことだけは伝わりました、みたいな。それだけ、表れているのだなと。

村井　それは大事なこと。この町には、そんな熱い思いの人もたくさんいます。

勿論、町のなかでは　いろいろな争いみたいなものはありますが、そうしたことがあっても、観光資源である財産一つ一つ見ると本物です。本当にすごいと思います。最後は長浜の曳山祭りの子供歌舞伎みたいな財産、ああいうふうに子どもに、引き継げると良いですね。

長浜はお手本です、八幡にとっては。間違いなく先を走っています。長浜というのはおそらく八幡とほぼ同じタイプだと思います。長浜は頑張ってあのような素晴らしい町をつくってこられました。これは八幡とって、本当に良いお手本ですよね。

司会　近くにあって目で肌で感じられるというのは良いですね。

村井　やり方もそんなに離れてないと思います。

■『近江八幡市観光リニューアルプラン』の記憶

村井　『観光リニューアルプラン』は、観光振興計画です。先ほど言いました「まちづくり」という言葉は本文中に入ってはいますが、観光客の受入体制整備を目的とした計画でした。従来からの行政主導型の観光振興から脱却のため、観光組織体制の充実を図っていくという趣旨のものでした。

司会　調査もかなりされたようです。協会の統合、法人化もその時に既に構想されていたようです。

村井　市内観光地の定点集客調査なども行いました。形にするためにいろいろな情報を盛り込みましたが、先ほどから言っている想い、市民にいかに八幡に住んでよかったなとか思ってもらうか、そこをスタートラインにして書いたものではなかったのではないかと思います。

Copyright © 2022 JTBF All Rights reserved.

計画策定の最初はそういう思いでした。そしてある程度ベースが出来てきて、次にどのようにするかで、分かれていた観光協会と物産振興会を一つにしていくなど、具体的な内容としました。精神論の云々だけではないということですね。『観光リニューアルプラン』の前には、『中部西地域観光振興計画[xxxi]』もありました。

『観光リニューアルプラン』は、確かコンサルタントに委託していましたが、策定については、丸投げはせず、何度も会議を開催し、かなり中身に絡んで、市としての方向性を出していったと思います。

田中　当時は、歴史街道なんかでも結構取り組んでいらっしゃいましたね。

村井　歴史街道は、当時は当然ながら観光客を呼ばないといけないというような思いもありうまくつながりました。歴史街道の番組を制作している東通企画という会社に、ヴォーリズシンポジウムで活用するヴォーリズの生涯をまとめた20分ビデオも作ってもらいました、あのビデオは素晴らしく、東通企画のディレクターが本当に熱心で、またしっかりと調べて根拠に基づいた内容に仕上げて頂きました。あのビデオは絶対地域に残しておかないといけないです。私は、ヴォーリズさんの人柄や思いなども含め、ヴォーリズさんを学べる素晴らしい作品と思います。ディレクターと一緒に吉田希夫さんの家などの資料を調べて、きちんとした内容に基づいて作成されました。

『観光リニューアルプラン』の内容は、豊臣秀次、近江商人、琵琶湖などが中心だったと思います。本当に最初の頃でしたので、由布院のまちづくりも勉強になりました。いろいろなイベントをされていました。牛喰い絶叫大会など。彦根、長浜、近江八幡で「びわ湖城下町協議会」で行きました。

田中　私が観光協会に入る前だったと思います。

村井　その頃ですね。由布院はいろいろなイベントをされていて、モニターとして、中谷健太郎さんの凄い良い旅館に宿泊させてもらいました。中谷さんの所だけで図書館も茶室など何でもあり、外に出る必要がないくらいでした。

由布院には、私を含む市役所の職員2名と長浜観光協会の清水事務局長さんと3人で行きました。本当に勉強になりました。そして、結局「人」だと思いました。そうした地域には本当に核となる人がいます。その人の考えというか、本当に良いと思えることは真似ても良いと思う。基本、素晴らしいなってことに気付かないことはよくあります。当然、地域ごとに特徴があるので、八幡に持って帰って合うとは言えませんが、そういう考え方というのは絶対ヒントになるわけです。由布院には、中谷健太郎さんや溝口薫平さんなど、個性的で先を考える人が多くいました。

また、旅行作家の故藤嶽彰英さん。そして山と溪谷社の三堀裕雄さんなど。あの先生方もいろいろなヒントを真剣に語ってくれました。その中で、私は近江八幡を光らせる、だからもっとこういうことをしたらどうですか、というような話には結構のりました。

田中　そうですね。テクニックみたいな話はあまりですね。西本梛枝さんにも、行きたい観光地には会いたい人がいるとか、そこに顔が見えるなど言われましたね。

村井　それは言えるでしょうね。この地域を愛しているということが、滲み出ているような人に出会いに行かないといけないのではと。

大体語りつくしましたけど、八幡には、いろいろな個性派がたくさんいますね。

■近江八幡の今とこれから

村井　近江八幡でも良いなと思うのは、今八幡に県内外の芸術家がたくさん入ってきて、BIWAKOビエンナーレを開催していることですね。

田中　あれも、もう10回目ぐらいになっているのかな。

村井　すごいなと思っています。行政主導ではなく、民間独自で近江八幡の古い町家を舞台にアートを繰り広げられています。これが、本来八幡がもつ人を引き寄せる魅力ですかね。

田中　大変だったと思います。ここに人を呼んでと思うと大変ですけど、町家とかにこだわって。2年に1回されています。今年またあります。

村井　町屋を舞台とした芸術（アート）に魅かれて外から来てくれる。私にはこのような発想が無かったです。しかし、芸術というのは、子どもから大人まで地域の人も楽しめるので、良いことだと思います。

Copyright © 2022 JTBF All Rights reserved.

田中　町家に価値観を感じて遠くから来てくださるというのは、擽られるところもありますし、もう一度見てみようという感じにはなりますね。

村井　野間邸のボーダレスアートギャラリーNO-MAもすごいなと思います。近江商人の町家を、障害のある方たちの美術館に変えて公開しています。あの周辺は私は、これからの八幡が目指すモデルだと思います。NO－MA の前は NPO 法人しみんふくし滋賀が、介護施設と共にイベント会場として活用できる、元気な高齢者を応援するスペースを運営しています。その隣の元材木商人の町屋は小規模多機能居宅介護と言って、介護が必要な人が泊まれる施設になりました。周辺施設が一体として地域で困っている人たちのためにも使うし、また障害のある人の芸術が見られる美術館であったりイベント会場など、これからの日本の国が目指す共生型社会のモデルがそこにはあります。

田中　先端というか、そうですね。

村井　観光の原点は生活文化だと思うのです。生活文化とは、地域の人々の連綿と続いてきた営みの中で生まれた有形無形の文化ですよね。それが地域の特長です。生活文化の延長線に観光というものがあるべきだと思います。八幡はまさにそうです。

田中　近江八幡の歴史、生活、延長ですね。

司会　改めて伺いますが、近江八幡で、「住んでよかったまち　訪ねてよかったまち　もう一度訪れたいまち」は、誰がいつごろ使い出したのでしょうか。

村井　この言葉になったのは、前観光物産協会会長の山本傳一さんによってです。私が商工観光課に来た時、最初は浜田長治郎さんという真珠屋さんが会長でした。その後を、今のたねやの山本傳一さんという人が会長に就任頂きました。私はまちづくりという観点で取組みましたが、その時はまだ「住んでよかったまち」「訪ねてよかったまち」みたいな二つのイメージでした。「もう一度、訪れたいまち」というところまで入れたイメージをつくって頂いたのは、山本傳一さんです。会長とは本当によく一緒に観光 PR で東京や大阪に行ったりしました。和菓子で有名な「たねや」の長男さんでしたが、腰が低く観光に対する思いは我々と同じ目線でした。本当に私たちと同じ目線で動かれ、先頭に立って行動して頂ける会長でした。

田中　山本傳一さんは、ヴォーリズさんに可愛がってもらっていたようです。だから余計に、その思い出話などを私たちにもしてくださりました。山本傳一さんは、近江八幡の宣伝を一生懸命してくださりました。

村井　一番に住んでよかった町が絶対あるべきだというのは、山本傳一さんも思っていたと思いますが、一緒に観光をしているみんなもそう思っていたと思います。

田中　順番はそうなのですね。観光客のためによかった町ではなく、住んでいる人間が。

村井　訪ねてよかった町が一番最初ではなく、住んでよかった町があって、訪ねてよかった町、もう一度訪れたい町。そういうことですね。本当にそうです。いわゆるまちづくりという視点だけは、ずっと持って取り組んでいました。

田中　あくまで主体性は自分たちにあって、自分たちの未来、将来を考えて、切り売りするとか安売りするとか嫌でしたね、みんな、消費するというのが。

村井　その町を愛する気持ちが観光客にも伝わり、私たちのまちが「もう一度訪れたいまち」になると、故山本会長は考えられたと思います。

■行動する人を見守り手綱を引く人の存在

村井　ちょっと私たちは変わっていたのでしょう。今退職して皆と飲んだりしますが、当時行政職員というのは、尻叩かないとあまり動かないというようなところもありました。その中で、私はどちらかというと走り過ぎるところがありまして、当時の部長は OB 会の宴席などで僕に対して、「動きすぎるので大変だったが、手綱を引くほうが面白かった」と言って頂きました。今でもそれはありがたかったなと本当に思います。本当に面白かったから。何でも好きなことさせてもらえました。

田中　本当に見守っていてくれる人でしたね。「なかなか、あいつ、椅子に座っとらへんねん」と笑いながら。

村井　「今日どこに行っとんのか分からん」って常に言われていたくらいです。当時は本当に席に座っているということはなかったですね。ある程度、私という人間が分かってくると、何も言われなくなりましたが、

Copyright © 2022 JTBF All Rights reserved.

それが大事だと思いますね。上司と部下の関係は、当時はそうでしたね。そして、当時の課長からもほっておかれました。つまり好きにさせて頂いたわけです。それが今でも一番楽しい思い出です。良く飲みに行こうって言われますね。本当に楽しい時代でした。

■沖島は私たちの財産

村井　さて、90年代はリゾートがありましたね、長命寺の港の整備とかありましたが、あまり興味がなかったですね。ただ、沖島は近江八幡にとって他にはない財産だと思いましたけど。交通の便が悪いなどがありました。しかし今は、沖島には、毎年かなりの観光客が来ていますでしょう。

当時で500人か600人ほど来られていましたが、もう漁業はなかなか難しくなってきて、何とか漁業に代わって観光とかも含めて、町の活性化したいっていう思いは当時から持っていらっしゃいました。そして私たちも何とかしたいなというふうに思っている時でありました。そういう中で、沖島に帰ってきて、つくだ煮屋を継いで、今商売も大きくなっている方もいます。

このように個人で上手く観光の波に乗った人もいますし、沖島全体ですと、湖島婦貴の会[xxxii]で弁当作ったりもしています。また自治会の事業として連絡船を1時間に1本走らせたりなどされ、交通の便はかなり解消されました。当時は、善通丸という船が1日1便沖島と長命寺を結ぶ線しかありませんでした。

そのため、取材に行くと帰って来られません。そういう時代でした。沖島は、その当時まで公衆トイレがなかったのです。観光客誘致に向けて行政でトイレや看板などハード整備に多く取組みました。

田中　自分の家が覗かれる、自分のトイレを何故貸さないといけないのかという思いが住民にありましたが、その辺から環境も整ってきたので、迎え入れてもらう気持ちも芽生えてきたようです。行政としての役割を果たしてくれたのです。東近江の夏祭りなども、会場を沖島にされていましたよね。

村井　言ってみたら沖島の人たちは琵琶湖の水を守っているのです。琵琶湖の魚が食べられるということは。そこで、永源寺という山側の人たちに、沖島と言うところを知ってもらうために、沖島で江州音頭の大盆踊り大会をしようと計画しました。沖島に 1,000 人ぐらい集める。では、どうやって渡す船を確保するということになる。そこで、びわ湖観光やオーミマリンなどの観光船を手配して対応しました。この地域は昔は2市7町と言って多くの自治体がありましたが、そこが 1 年に一度だけ集まって盆踊り大会を持ち回りでしているのです。それを八幡の当番の時に沖島で開催しましたが、今考えると良くできたなと思います。島の人たちも嫌がらず、温かくもてなして頂いたことが今も忘れられません。

田中　普通、盆踊りはもっと大きい市役所や、どこか運動公園など会場にするのですが、例外的に八幡では沖島を会場をとしました。結構反発を食らっていました。なぜそのようなところに行くのか、どこに駐車したら良いのかなど。その中で、行政として沖島に注目しているのですよとか、沖島の人に、あなたたちの住んでいる島はすごいんですよというのを、メッセージを発信してくれたのです。

村井　本当に、沖島の人は、喜んでくれました。そして、八日市とか永源寺などから多くの県民が沖島に渡りました。そしたら、沖島の人たちが、こんなこと初めてだと言って、アユやモロコの湖魚料理をたくさん出してくれたりして、すごく喜んでくれました。あの時は、他から参加された人は、沖島の存在というか、沖島に一度も行ったことない人が多くいたわけです、この辺の人であっても。沖島に行って、沖島ってすごいなって思われたようです。夏の夕方なので涼しく気持ちも良いですし。島の人は島の人で、こんなイベントは初めてだと喜んでくれて、それは本当に良かったですよ。そして、すごい勉強になりました。あれはいつ開催したのか正確には忘れてしまいました。

田中　1997年か1998年か、私が観光協会に入った後くらいの時です。

村井　本当に一か八かのイベントで、当日雨が降ったら終わりでした。

雨降ったら終わりというようなイチバチのイベントはたくさんやりましたが、全部成功しました。本当に晴れ男です、私は。「八幡堀たそがれコンサート」も、雨降ったら終わりなのです。楽器が濡れますし。ちょっと降りかけの時もありましたが、完全に中止というのは一

Copyright © 2022 JTBF All Rights reserved.

度もなかったです。日牟礼八幡宮の薪能は何回か降りましたが、テントを張って開催しました。そういうイチバチのイベントが大体成功しました。

田中　ついている人でした。確か去年はクリーン作戦が、雨に降られて初めて中止しました。

村井　観光というのは天気なら8割成功です。観光にはいろいろなことがありますが、法律を中心に考えるものではありません。また如何に仲間を増やすかも大事なことです。川崎木珠さん[xxxiii]は昔から数珠を扱っていましたが、朝鮮通信使のイベント「街道文化と近江八幡」の時にカラフルな色をした木珠を観光ポイントで集め、ブレスレットにするというブレスレットラリーを考えてくれました。単なる数珠だけではない、若者向きのデザインのもの。だから観光のイベントというのは、伝統産業から新たなニーズを生むというそういう役割もあるのです。

田中　宗教道具じゃなくて、ちゃんとしたおしゃれなものですよね、大体。

村井　ブレスレットラリーはスタンプラリーの代わりに赤や黄色の数珠を置いておくのです。それをみんな集めたら、このきれいなブレスレットができるというのをしました。川崎さんには今でもお礼を言っています。

司会　今はその取組みは。

村井　そのようなことはやればできます。誰かがリードしなければなりません。継続することが必要です。完成したら、なかなか綺麗なものです。そのようなことをやってきましたが、本当に面白かったです。

■「観光はまちづくり」というイメージをつくってきた

司会　今までのお話を聞いていますと、住民向けに知ってほしいというのがあって、それらに向けてコンサートだったり、いろいろやってこられた中で、住民の反応とはどのような感じだったのでしょう。なんと申しますか、観光というのはすぐ受け入れられたのでしょうか。

村井　私が目指してきたのは、「観光はまちづくり」というイメージです。例えば八幡堀たそがれコンサートで嬉しかったのは、夜に開催すると、食べたものをそこに捨てたりする人もいてちょっと汚れるわけです。しかし、次の日の朝、近所の人が皆掃除してくれるのです。そのイベントが、地元にとっても嬉しいものだったから、次の日、掃除して頂いたのではないでしょうか。また、八幡堀保存再生運動によって引き継がれた堀端に住む市民の矜持というものも感じました。

このように、基本として、常に舞台をきれいにしておもてなしするという理念が近江八幡の観光だという意識付けが、私はできていると思います。だからたくさんの観光客だけでなく、市外からの業者も多く入ってきているけれども、市民の人に喜ばれるようにやるということを、店を開かれる方々にもこちらからしっかり伝えないといけないと思います。私たちがやってきたいろいろなイベントは、地元の人が本当に協力してくれました。ちゃんと次の日に掃除とかして、それはやっていることに対して理解が得られているからです。ここに店を出す人に対しても、観光物産協会が、きちんと今までに培われた規範意識を伝えてもらいたいとおもいます。当然、皆さん自治会には入っているとは思いますが。

田中　そうですね。売ったら終わりではないですね。

村井　その地域の人のためにも、なにか目に見えるメリットになるようなことをするなどを、八幡の観光に携わる者の精神にしてもらわないといけないのでは。ボランティアガイド協会の人たちは、観光施設だけでなくお店なども案内しておられます。お店側もそれは案内してもらえる店にならないといけないです。ボランティアガイド協会の人たちも、自分たちが自慢できるお店を紹介されていると思います。

店主の姿勢や志を含め、地元の人に理解をしてもらえるようにならないといけないと思います。私はそういうふうに思って、地域の人たちが、その商売に対して好意を寄せる、所謂まちづくり、住んでよかったまちが観光の第一義だろうと。それと、観光というのは、中国の『易経』が語源で、国の光を観るということ。それは正しいと思いました。それは忘れたらあかんというふうに思いました。

■観光振興の意義を市民の目線から再構築することが必要

村井　当時（1990 年代）は、観光は産業振興の一部

Copyright © 2022 JTBF All Rights reserved.

としか考えられていませんでしたが、地域観光振興という分野は今後のまちづくりの柱になると思っていました。それは市民の目線で観光というものを考えていくことでした。

ただ、ある大学のゼミ生から観光協会の役員 15 名が集まる場で次のような意見をもらいました。市民は近江八幡を観光地と思っていないこと、近江八幡の観光は、産業振興としてなのか、まちづくりとしてなのか、その位置づけが明確でないこと、観光業に携わる人でも理念を持っていないとしか考えられない行動を目にしたということの3点でした。

観光は入込客数で評価されている側面があるため、マスコミや旅行エージェントの注目を引く活動に力が入り過ぎていて、結果として市民を巻き込んだものになっていなかった。市民に対して観光振興の意義というものを啓蒙できていなかったのだと反省しました。また自分たちの観光に対するアイデンティティが明確でない、確立できていないことをその場で再認識しました。建前としてまちづくり理念を掲げても、市民に向かって行動しなければ、まちづくりとしての観光ではないのではないかと。

もう一つ、観光のとらえ方はまちづくりとしての観光と産業振興としての観光があります。それはつまり社会学的な観光と産業学的な観光の観点の違いだと思うのですが、これはそれぞれに重要な課題です。それをどういった形で整合性をもたせるか、観光振興の意義をもう一度市民の目線から再構築し、市民と共に取り組めるものにしていかなければいけないと感じました。近江八幡が近江八幡であり続けるために、何を子供達に引き継いでいかなければならないかを、考えていかなければならないのですが、その鍵はやはり市民の視点に立って、近江八幡の観光のアイデンティティをどういった形で築いていくかかと思います。

■その時々に志を持って取り組むこと、怖いのは何もしなくても観光客が来ていること

司会　観光部署に来られる前に、観光に対するイメージというのは何かあったのでしょうか。

村井　全くなかったです。行政の人間というのは、法律いうか地方自治法とか、地方税法とかあって、そういうものに基づいて仕事します。ところが、観光部署に来たときに、そういう自分が何かに基づいて仕事するというものが全くないと感じました。だから最初のイメージは、観光振興は人を呼ぶこと、先ほどお話したような観光産業の振興というイメージだけでした。ただ、前担当が、当時から近江八幡国民休暇村とタイアップして観光客を呼んでくるとか面白いことをしていました。だから、そういうことなのかなというふうには思っていましたが、先ほど言いました「まちづくり」という視点は、自分で勉強する中で「すごい人がいるわ、こんな人が八幡にいたんや」ということを学ぶ中で、少しずつ醸成されていきました。

最初の頃は、観光協会の事務局が課内にありましたが、観光協会というのは、観光客を誘致して業者さんが儲けるためにあるくらいのイメージでした。観光に対する思いの変化の中で「観光ボランティアガイド協会」や、「八幡堀ほっとクリーン作戦」などをつくってきました。それまでは、そんなことは全くなかったですね。

近江八幡青年会議所25年史など読んだりして、この町を好きになり、この町のファンを増やしたいと思うようになりました。八幡の歴史の中で、白雲館などを商人が造ったとか、ヴォーリズさんが1人で八幡に来て幼稚園を開いたなど。そういうことを学ぶ中で、観光客を呼んでくるというのはちょっと違うのではないかなと思うようになりました。そしてヴォーリズのシンポジウムを開催できたことで「観光はまちづくり」と確信を持ちました。今、観光行政の流れが変わって、観光を担当している人が、観光振興をどのように考えて仕事をしているのか、逆に聞いてみたいと思いますね。

田中　継承されているかどうかということでしょうか。

村井　継承というか、それはその時代時代だと思うので、自分で考えないといけないですね。

田中　それはそうですね。そして教えられるというか、与えられるものではないのですよね。

村井　与えられるものでもないし、待っていても。ただ怖いのは何もしなくても観光客が来ていること。行政はそれで済んでしまうのでは。しかし、それでは面白くもないのではないですか。仕事というのは、田中君もそうだと思いますし、皆、そして後藤さん（司会）もそ

Copyright © 2022 JTBF All Rights reserved.

うだと思いますが、自分でこの年はこういう仕事したとか、そういう記憶が自分の中に残っていること。私はそれをいつも大事にしていました。税務課の時は農業台帳などを作り、法人の課税もやっていました。今でも、この年にはこういう仕事したなと覚えています。

田中　足跡っていうような感じですよね。

村井　たまたま公務員でしたが、自分の人生として、皆それぞれの仕事の中で、この時にはこういう仕事をしたというのは、持っていないといけないと思います。そういう中で努力が生まれて、生かされているのです。私はそれをずっと思ってやってきたのが良かったのかも知れません。今、福祉施設長をさせてもらっていますが、今でも自分はこのような福祉のまちをつくりたいなというイメージを持って取り組んでいます。

この間も障害福祉と保育と介護施設の社会福祉法人が連携を持ちました。今まで福祉行政は縦割りでした。高齢者は高齢者施設、障害は障害施設、保育は保育所と。例えば家で障害のある子どもを抱えながら、認知症のおばあちゃんの面倒を見ているなど家族単位でみると、課題が輻輳しているのです。そこで横串をさすために我々で組織立ち上げて、多様な課題に向けて支援をしようとなりました。

生きていく中で、私たちはそれぞれ転機はありますが、その時に自分はどういうふうに志を持ってやるか。その時に自分がどういうふうな思いを持ってスタートを切るかということを常に思っています。それを忘れてはいけません。だから一生に一度ではなく、いろんな転機。その時その時に、自分としてきちんと初心を持つということが、生きていく上では大事だと思います。そのほうが楽しい生き方できると思います。楽しいというか、いつか人間死んでいくので、世の中のために少しくらいはという。

田中　拘りを持って自分が一生懸命頑張るというのは大事ですね。

村井　なんでもかんでも頑張るのではなしに、今置かれている立場や、できることとできないこともあります。時の課題も違いますが、それの中で大事なのは結局は志だと思います。

私が住む小田町の有志でメダカの学校小田分校という組織を作り、10年の活動成果を元に本を出版[xxxiv]しました。町内の川には黒メダカが棲息しているのです。メダカというのは属地性が強くて、あまりそこから離れたりしないいのです。そのメダカがいるというのは水がきれいということです。メダカを守る運動いうのは水を守る運動になって、20年近く活動をしているのですけども、10年たった時にみんなで本を出しました。10人ほどのメンバーや協力頂いた歴代の小学校長さんや自治会長さんの想いなどを書いてもらっています。

それで、ここに書いていることも、今お話したことと共通していて、これは環境保護をまちづくりという視点で活動をつづけ、10年間やった成果として出版できた本です。

田中　また誰かが読んで感動して、また地元で活動しようっていう人が出てきますよ。記録は大事ですね。

村井　これは活動の集大成みたいなもので。今度20年史を出そう言っています。明日の晩にはメダカの総会があったり。

司会　後で振り返ろうと思ったときに何かが残っていると、後の世代が受け継げるかなと思います。

村井　本当にそうですね。繰り返しとなってしまいますが、残念なのは、ヴォーリズさんを知る人たちにインタビューしたテープがあったと思うのですが、それらが保存できていないことですかね。杉田静山さんは近江兄弟社学園の出身で、ヴォーリズさんの奥さん一柳満喜子さんに直接教育を受けた人です。

田中　満喜子さんに教えてもらっていたのですか。

村井　そうです。杉田さんは満喜子さんからマンツーマンで教えてもらっていた人です。耳が聞こえないのです。だから差別も受けたりされていたようですが、満喜子さんに、差別に負けない精神や、生きる道を学ばれました。そして、竹細工で県の指定無形文化財までなられました。観光と福祉は共通していると思います。まちづくりとして共通しているなと思います。観光のあと福祉に行って、今の仕事をさせてもらっていますが、観光に10年間いたことが、今も役に立っており良かったなと思います。

そう言えば、計画のことでしたね。あまり覚えてないのです。よく視察も行きましたね、中部西地域観光振興協議会で広島県鞆の浦などにも行きました。

Copyright © 2022 JTBF All Rights reserved.

■近江八幡のこれまでの柱とこれからの柱
－まちのためにどのような存在であるべきか

司会　どちらかというと、日本全国「住んでよし、訪れてよし」というような言葉が各所で使用され、それはそれで重要だと思うのですが、独自の活動の中から考え方や言葉が生まれてくることのほうが重要かなと思っています。もっと深いというか。独自の言葉があったり、残していきたいコトなどがあったり。そこがないままだと、地域活性化として観光というのは、本当の意味で役に立たないのではないか。根幹というか、大事なところは何かを押さえていない観光になってしまうのでは、という想いがあります。

私自身が10年間くらいずっと見てきたのが由布院です。独自のまちづくりの精神というものなら他の地域でもあるのですが、まちづくりから観光にまで踏み込んで言及していて、何らかの独自の理念があるというところはあまりないのかなと。現実世界にカタチとして生み出す技術は勿論必要なのですが、観光の理念、精神として昇華している地域に出会うのは、なかなか難しいなと感じています。それは、こちらの感じる力が十分でないことの裏返しでもありますね。

村井　先に申しましたが、由布院にも行きました。金鱗湖や町並みも見せて頂きましたが、リーダーシップのすごい人にお出会いできたことが、強く印象に残っています。

近江八幡では、あまり観光という言葉を使ってまち興しをしたいというふうに多くの人は思ってはいない雰囲気がありました。

JC の当時中心の方々、川端五兵衛さんも「観光とは違う」と言われて、それまで観光というのは人を呼ぶということがメインみたいな言葉で皆受け止めていました。しかし、それは違うということを言っていらっしゃったのだと思うのですけど。しかし、まちづくりという視点で進めてきた結果、今観光と言っても、すんなりと皆受け入れて頂いているのではないでしょうか。

田中　だいぶん理解はされるようにはなってはきました。少なからず、観光は特殊な一部の人たちの利益のためのキーワードみたいなこととは違うと。

村井　ちょっとこの間も聞きましたが、例えば、市内の有名な観光スポットで、他の商店のパンフレットをなかなか置いてもらえないとか。それを聞いたりすると、我々が目指してきたものとは・・・。そのようなことをしていたら共倒れにならないか。観光は相乗効果です、お互いが協力し合うことは、まちづくりという視点から当然と思います。しかもこの近江八幡というまちがあるからこそ、今いろいろと商売ができるのです。ここの町のためにお店がどういう存在であるべきかいうのは、それぞれがこれから考えなければならないと思います。

司会　この町のために自分がどういう存在であるか、そういう考えはどこから生まれてきたのでしょう。

村井　ここで本当に財を成してきたという人いうのは、皆そういう人です。財を成してきたというか、近江商人、ヴォーリズさんでもそうです。秀次公も、八幡堀を頑張って再生してきた市民、ここまでまちを守ってこられた人たちは皆そうです。この八幡というのは、脈々とみんなが町をつくってきた流れあるわけです。町の柱になるような大きな中心人物はみんな、それを次にどういうふうにつないでいこうと考えてこられたのだと私は思います。だから、自分のところだけを PR するようなところは、八幡の主流にはなれないということを歴史が証明していると思います。

司会　逆にこれからのまちの柱となる次の方というのはどなたになるのでしょう。

村井　観光という視点から考えると、次の人として、八幡の中で田中君が一皮むけて。田中君も大変と思いますが、この仕事が生業であり、みんなを上手く動かしていけるのは、田中君の立場です。

武佐町では、多くのお客さんに来てもらって、町の誇りにするため、ムシャリンドウウォークを開催するなど、思いのある人がたくさんいます。そのような思いのある人を、上手くコーディネートをして八幡のまちづくりにつなげるのが、田中君の役割と思います。これから大事なのはコーディネートだと思ったりします。物凄く力のある人がぐんぐん引っ張ってくという時代ではなく、それはこれからの時代は難しいでしょう。

司会　どちらかというとコーディネート型の人がこれからまちづくりには求められますかね。

村井　そういう人がこれからは必要だと思います。し

Copyright © 2022 JTBF All Rights reserved.

かも近江八幡を愛している人。この町が好きで、この町の良いものを誇りとして観光に携われる人。

田中　エンジンというか、オイルというか、何か上手く潤滑油で回すことは大事だと思いますね。

村井　近江八幡には女性の方で優れた人がたくさんおられます。ただ残念なのが、なかなかその人たちが表に出てこられない雰囲気もあります。本当はそういうところを上手く「八幡のおかみの会」などして引き出してはどうかなと。八幡のまちづくりを支えてきた人たちが、おかみさんの立場で見た八幡の振興というのをいっぱい聞き出すことも興味深いのではないでしょうか（ヒアリング記録2）。そのようなことは、いくらでも仕掛けようと思ったらあると思います。

　実際みなさん集まられたら、いろんなこと言われると思います。そういう視点も必要だと思います。ちょうど今一つの過渡期だと思います。今までの引っ張っていくという進め方の時代は終わろうとしていると思います。先ほど言ったコーディネートとは別に、表に出なかった、裏方で支えてきた女性たち（おかみさん達）が、まだ生きておられます。皆さんまだ元気です。その人たちが、八幡の観光の将来がどのようにあるべきか、どう思っておられるかを聞くことも今後大いに参考になるのではないでしょうか。

（発行：2022年6月17日）

＜ヒアリング記録　3＞
日　時：2018年3月9日（金）14:00-16:00
場　所：白雲館にて
対　象：村井幸之進氏（元近江八幡市役所観光担当部署職員）
同　席：田中宏樹氏（（一社）近江八幡観光物産協会　事務局長）
司　会：（公財）日本交通公社　観光地域研究部
　　地域戦略室　主任研究員　後藤健太郎

・本資料は著作物であり著作権法に基づき保護されています。著作権法の定めに従い引用する際は必ず出所を明記してください。
・本資料の全文または一部を転載・複製する場合は著作権者の許諾が必要ですので下記お問合せ先までご連絡ください。
　公益財団法人日本交通公社　観光地域研究部　後藤
　電話番号：03-5770-8440
　Website：https://www.jtb.or.jp/

---

[i] 近江八幡観光協会の会長に1992年6月に就任。1997年4月に（社）近江八幡観光物産協会の会長に就任、2009年6月まで務める。（株）たねやの相談役。2015年に逝去。
[ii] 近江八幡観光物産協会に残る総会資料を確認する限り、1997年2月には、本キャッチフレーズが使用されている。
[iii] 1991年9月に初めて開催され、現在も継続実施されている。
[iv] 豊臣秀次（1568～1595）。豊臣秀吉の姉ともの子。信長亡き後の安土城下の民を近江八幡に移し城下町を開設。
[v] ウィリアム・メレル・ヴォーリズ（William Merrell Vories、1880年10月28日-1964年5月7日）。日本名は一柳米来留。近江八幡市の名誉市民第1号。1994年が没後30周年。
[vi] 1992年3月24日に発足。
[vii] 近江八幡観光物産協会主催で行われる市や各企業・団体が参加する清掃活動。1990 年開始。
[viii] 1993年に93年ぶりに演じられた。
[ix] 1993年度に設立された財団法人。琵琶湖をはじめ、滋賀の優れた自然環境の次世代への継承や自然と人との共生を目指し、ヨシ群落の保全や水草の除去、県土の環境美化・自然保護、さらに環境情報の発信を行うなど琵琶湖の生態系および水質の保全のための事業に取り組む。
[x] 水郷を舞台にして、琵琶湖の生態系を守るヨシの大切さを訴えるイベント。同園地には特設ステージが設けられ、花火を合図に約5ヘクタールのヨシ原が一斉に点火された。
[xi] 全国的にも例を見ない女性だけのフルートオーケストラ。滋賀県在住・出身者の音楽大学卒業した音楽家の活動の場を作り堅苦しいと思われているクラシックを親しみやすいフルートの音色で多くの人々に楽しんでいただきたいという目的で発足・活動。
[xii] 1905 年当時の名称は、滋賀県立商業学校。1908 年に滋賀県立八幡商業学校と改称。
[xiii] アメリカカンザス州はアメリカ合衆国の中西部に位置する州。レブンワース市はレブンワース郡の郡都。
[xiv] 元（株）近江兄弟社社長。吉田悦蔵氏の長男。
[xv] ヴォーリズ記念館（一柳記念館）の館長。
[xvi] 比叡山の青年修行僧。キリスト教徒に改宗し、ヴォーリズの建築事務所で勤務。後に肺結核で死亡。
[xvii] 1997年9月23日設立。
[xviii] 豊郷村（現豊郷町）生まれ。株式会社伊藤忠商店（現伊藤忠商事）の取締役・支配人、株式会社丸紅商店専務取締役を歴任。
[xix] 西川家は近江八幡を代表する豪商であり、西川株式会社(ふとんの西川)の祖として知られる。
[xx] 知識を高め、品性を磨き、自己の人格形成につとめること。（デジタル大辞泉（小学館））／問を修め精神をみがき、人格を高めるよう努力すること。（大辞林　第三版）／徳性をみがき、人格を高めること。
[xxi] 近江八幡市の郷土史家。
[xxii] 国民休暇村として 1962 年に全国で初めて開設。現在は、休暇村近江八幡。
[xxiii] 1990年2年3月に策定。行政指導型からの脱却を目的に受け入れ体制整備を目的とする計画。
[xxiv] 同協議会により『中部西地域観光振興計画』が『近江八幡市観光リニューアル計画』の前に策定されている。
[xxv] 1992年4月22日設立。三市の観光協会によって結成され、観光客の誘致の PR 活動や三市を結ぶ観光ルートの開発、観光グッズの製作を進めた。
[xxvi] 1991年9月14日に北陸本線田村駅-長浜駅間が直流化された。これにより同駅発着の一部の新快速が長浜駅へ延長された。
[xxvii] 亀の井別荘のご主人。溝口薫平氏とともに、由布院のまちづくりを行なってきたリーダー。
[xxviii] 由布院玉の湯のご主人。
[xxix] 正式名称は「陶芸教室　水茎焼　陶芸の里」で、長命寺に近い中之庄町にある陶芸体験のできる施設。
[xxx] 『失敗者の自叙伝（第二版）』（近江兄弟社・湖声社）p.126、p.141。
[xxxi] 1市3町（近江八幡市、安土町、五個荘町、能登川町）で策定した計画。別名『近江水郷と天びんの里リゾート計画』。
[xxxii] 沖島漁業協同組合の婦人部により運営。6名ほどの有志で“湖魚の若煮”を炊いて、島を訪れるお客様に販売していたのが始まりとのこと。（ホームページより）
[xxxiii] （株）カワサキ。1928 年創業。
[xxxiv] 『ふるさとの原風景を子どもたちに　メダカの学校小田分校10年のあゆみ』（メダカの学校小田分校10周年記念誌実行委員会編集、2010 年）

Copyright © 2022 JTBF All Rights reserved.